
ごっど う` おいす！

しげっきー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ごっど う おいす！

【Nコード】

N2558H

【作者名】

しげつきー

【あらすじ】

のんびりとした普通の高校生の主人公、柴又秀斗の身に降りかかる、ファンタジックな出来事を綴った物語。反則をあえて書いていきたいと思っています。

ぶろろーぐ（前書き）

他二つの筆が進みません（ー；）

ですが、更新の止まった地味でつまらない作品でも、毎日チェックしてくれている人がいる、ということに感動しました。

なるべく早く他二つの更新もしたいとは思いますが、きっとしばらくは無理です。

なので、せめてもの気持ちとして、この作品を書きはじめました。

自分の小説を読んだことがある人も、無い人も、小説一作品も仕上げることできていない中途半端な人間ではありますが、ぜひ、本作品をお願いいたします。

ぶろろーぐ

——今日も空が青いなあ。

のほほんと空を眺めながら、今日も学校へと向かう。

そんな俺は柴又 秀斗17歳、彼女無し。現在高校二年目を謳歌しており、そんな俺が通う学校の名前は^{おおばか}大葉香学園という、なんとも超前衛的ネーミングな学校だ。ちなみにおおばかという割に学力偏差値は平均よりちよつと上だったりする。

俺が住み、また俺が通う大葉香学園があるこの町は^{やたも}八田茂町という名前。ド田舎ではないが、まあ田舎の分類に入るだろう。一応首都圏なんだけど……。

「よっ！ おはよう秀！！ 今日も1日頑張ろうぜ！！！」

やたら！マーク多いこの男は^{そつた}左右田 ^{かずよし}和義。ゴツい。ちなみに彼女なし。見た目はとってもいかつくて、とても堅気の人には見えないのだが、根はとっても優しくて友達思いのやつ。俺の親友だ。ちよつと前までは三度の飯より少女マンガが好きだった。モテない理由はここにあり。

「だった」といったのは、ある日カズが少女マンガを読んでいるところを女子に見られ、あつという間にその話は学校中に広まり、女子にドン引きされ、男子にからかわれ、それがトラウマとなって読

むのをぴたりとやめたからだ。

まあ今では男子とは元通り接している。つまり女子からは未だに変な目で見られることがある。

てか学校で読むな。そりゃお前が少女マンガを愛していたのはわかるが、お前みたいな超強面のやつがそういうの読んでたらどんな反響がくるかくらいは容易に想像できるはず。あ、無理か。こいつバカだし。

あ、さっきなんの説明もせずカズと呼んでしまったが大丈夫だろうか？ まあいいや。俺はカズの挨拶に適当に手を振って応え、またのほほんと学校への道を歩く。

梅雨の束の間の晴れを楽しみつつつ学校の門をくぐる。しかし本当にいい天気だ。最近どんよりぎみだったからな。

教室——俺の教室は2年4組だ。——に入り、自分の席に腰をおろす。

瞬間、ぐでーっつと机に被さるようにして倒れ込む。これが俺の至福の時だ。席替えしたばかりの窓際の席からは朝の陽光が入り込み、なんともいえない気持ちよさだ。

ぐでー……。うん、リラックス。ああ、夢の世界へと旅立ってしまいそう。

刹那、意識が飛んだ。

——……。くん、しばまたくん、起きて！

んえ？　　こころが安らぐふわつとしたような声が聞こえ、さらに眠くなる。

「もう！　柴又くん！　起きてつてばー！」

ゆすり起こされ顔をあげると、そこにはOh、マイエンジェル！

いや失敬。茶色がかった髪、眉は綺麗に整えられ、くりつとした瞳にくるつと長いまつげ。高い鼻にかわいらしい小さな口。その整った顔のパーツの土台である輪郭は、小さく、やや丸みを帯びている。俺の理想そのまんまの女の子。細くて白い腕を精一杯伸ばし、俺をゆさゆさとゆすっていた。

今俺が絶賛片思い中の、柏木　由希^{ゆき}。そのかわいらしい顔が、俺の目の前、それも結構近めにあったのだ。そりゃドキドキものだろ！　しかも俺を揺り起こしたのって由希ちゃんでしょ！？　ってことは必然的にボディタッチが発生したわけだ！

顔が熱くなったのがわかる。てか頭真っ白。ぼけー！。

「ふふ」　柴又くん顔真っ赤だよお？　大丈夫だよ、授業中に起こされて注目浴びるなんてよくあることじゃない。そんな恥ずかしがらなくなつて……」

いえいえそうじゃないんです俺はあなたの顔が近くにあつてしかもボディタッチまで発生したことを考えて顔を真っ赤にしてるわけなんですよ由希ちゃん！　なんて言えるはずもなく、まして由希ちゃんだなんて呼べねえよ。心の中でしか。てか腕も体も脚も細くて白いなこのやろつ。

……ん？ 待てよ、さっき由希ちゃんは何んていった？ たしか、じゅ、ぎょ、う、ちゅ、う、と言ってたような……

授業中！？

背後から殺気を感じ、おそろおそろ振り返る。

「貴様……、俺の授業で寝るとは。……いい度胸してんじゃねえか」

やべえ！ 死ぬ！ ほぼ間違いなく俺はこの世から消される！

……そんな気持ちにさせられる声、そして、殺気。この先生、授業中に寝るのは絶対にNGで、寝た奴は即“処刑”されるのだ。

「柳沢先生、すいませんでした！ この通り謝りますから！ だからストップ！」

クラスのみんながご愁傷様、とアイコンタクトで伝えてくる。ただ一人、柏木由希その人だけは、無垢な笑みを浮かべていたけれども。

……ああ、由希ちゃんこれから俺がなにされるかわかってねえよ……。ちよつと抜けたところがあるからな……。しばしの別れだ、現世よ。必ずまた戻ってくるからな。

ドスっ、と音が聞こえたような気がしたが、そのまま暗闇へと投げ出された俺には確かめるすべもない……。

目覚めると、白い天井の保健室……ではなく、普通に教室にいた。柳沢に潰された生徒は皆、放置されるのだ。なんでも、保健室に運ぶ役目の人が受けるはずだった貴重な授業の時間を潰すのはもったいない、とのことだ。よく見るとカズも横たわっている。

myエンジェル由希ちゃんはというと、ほんわかするような微笑みをうかべながら、

「もう、先生に注意されたとおもったらすぐ寝ちゃうんだからー」なんていつている。はあ、本人に抜けているところがあるのは事実しかし、俺への処刑は由希ちゃんの死角で行われる。いや、俺だけではない。由希ちゃんの周りの人間は皆、由希ちゃんの死角、つまりは柳沢が処刑される対象と由希ちゃんとのあいだに立って行われるのである。柳沢は由希ちゃんのことを気に入っている。よって、由希ちゃんのそのきらきらとした丸くて大きくてきれいな瞳に処刑の光景が入ることは無いのである。

——そして、由希ちゃんは死者をく眠った>と認識するのである。

ちなみに、よくわからないが、俺も柳沢のお気に入りらしい。まあ、普通に殺られるが。

二時間目からは特に変わったことは無かった。厄介な先生の授業は今日はもう無い。

いつものように昼休みを終え、いつものように午後の授業を受ける。今日も平和だ。

午後の授業を終える。家路につくもの、部活動へと向かうもの、集団で遊びに行くもの、教室に残って過ごす酔狂なものなど、——様々な者がいる。

俺は部活はオフということで、嬉々として家路についた。

今日もいつものように何事も無く終わり、また明日を迎えるのかな
ー、なんて思っていた。

このときは、まだ。

あんゆーじゅある

家に帰ると、そこには誰もいなかった。父さんは仕事で、母さんは……。ああ、思い出した。今日は友達とお茶しに行くんだー、とか今日の朝にはしゃいでいたっけ。

小腹がすいて冷蔵庫の中を見てみる。……。牛乳が少しと、ハムのパック一つ。いや、さすがにハムだけってのは悲しい。うーん、ちよつと面倒くさいけど買ってこようかな。いい天気だったし、外に出るのも悪くないか。

相変わらずのいい天気。またもや、伸びを一つ。外の気温はなんだかぽかぽかして、立ったままでも眠れそう……。って、さすがの俺でも立ち寝は無理かも。カズならいけるかも。いや、でもあんな強面の人が外で黙って突っ立っていたら……。俺なら全力で避けるね。たとえ寝ていたとしても。いや、というより立ったまま死んでいるんじゃないかと疑うね。弁慶のごとく。

とまあ変な想像をして全力で寒気がしてきたところで——せつかくのぽかぽかな天気が台無しだこのやろう。あの、乙女的趣向乃強面変態大馬鹿野郎左右田和義め、覚えてやがれ。——、近所のコンビニに到着。すると、白昼堂々俺と同じくらいの年齢のチンピラとか御呼ばれになっておられる怖いお兄様たちがたむろしておられる。しかもなんだか誰か囲まれている模様。おお、怖い。くわばらくわばら、つと。うん、関わらないのが吉。俺ってばか弱い男子高校生ですからー、あははー。

チンピラたちを極力無視しながらコンビニに入ろうとして、それでもどうしても気になってしまい、囲まれている人を見て。

——戦慄した。

目の前にいるのは。

囲まれている、その華奢な体つきのその人は。

真っ白な肌、茶色がかった髪で。

くるっとしたまつ毛、くりっとした瞳で。

紛れもなく、柏原由希、由希ちゃんその人だった。

頭が、真っ白になり。気づいた時にはなんの事情もわからぬまま、その集団の中心へと、割り込んでいた。

そこでふと、われに返る。なんだろうこのベタな展開は、と。この流れだと俺はこのとっても怖いお兄様たちと殴り合いの喧嘩になる。しかし俺はどこぞのスーパー高校生でもなんでもない、極々ふつつーの高校生なのである。一対一で闘ったとしたってこの目の前の筋肉ムツキムキのお兄様には勝てないであろう。さて、周りを見てみよう。……六人いる。冷静に考えて、勝率零パーセント。ムリムリムリムリ。

「ひ、でと、くん？」

はっ、いかん！ 折角格好良く登場したにもかかわらず、無言で考え事をしてしまった。しかも由希ちゃんシカトで。ん？ しかも今『ひでと』って呼ばなかった？ 学校では『柴又くん』なのに……。きつととってもテンパっていらっしやるのでしょうか。

閑話休題。さてさて、どうする？ いや、まだ会話を聞いてないから絡まれてないという可能性もある

「てめえ、その女のなんなんだ？」りませんでしたねはいすいません。由希ちゃんが俺のシャツの袖をキュツとつまんだ。くっ、かわいい由希ちゃん。だが今はそんなの気にしている場合ではない！だが気になるモノは仕方がないじゃないか！ いや、そんな余裕は。いや、かわいいんだから仕方ない！ いや

「おい、てめえ黙ってないでなんか言ったらどうだ？ アアン？」はいすいません余裕ありません。

……ガチでふざけてる場合じゃない。相手の殺気を感じる。ビビって足がすくみそうだ。急に汗が出てきた。さあ、どうする？

ジリジリと間合いを詰めてくる強面集団。その手には、鉄パイプ。……獲物を持っているなんて、さっきまでの俺はなんでそんなにお気楽でいられたんだ？ 自嘲の笑みを浮かべる。

「ビビって声もでねえか？」 その通りだよ。正直さっきから一言も発せていないのだ。

だがそんなかつこ悪いことは勿論言えない。

「はっ、ビビってなんかねえよ。お前らみたいなか弱そうな奴らにビビるわけねえだろ」

声が震えないように気をつけながら、か弱いという言葉からかけ離れた男達にそう言つてのける。精一杯の虚勢。まあ効果は見込めないが……。

「まあどうでもいいよ。お前、退かないとマジで痛い目遭うぜ？」
へへへ、と笑いながら鉄パイプを担ぐ強面集団。くそ、ニヤニヤしやがって。けど、悔しいけど、恐れ。体がふるえ、変な汗が噴き出す。

それでも、退くわけにはいかない。

由希ちゃんは、そりゃあ手が届くようなお人じゃないだろうよ。実はそう思ってる。——わかってるんだ。俺なんかじゃ振り向いてくれないってことは。

由希ちゃんのこと好きだけど、所詮憧れだつて、そう思ってる。けど、だけど、それでも、——好きなものは好きなんだ。手が届かないってわかってても、好きなんだから仕方がないじゃないか。だ

から、誰になんて言われたって、俺は、由希ちゃんが好きで、だから、えっと、……あれ？ 途中から頭がこんがらがってしまった。なんかクドいくらいに由希ちゃんが好きだって頭の中で連呼してたのは覚えてる。

落ち着け。テンパってる場合じゃない。アドレナリンが放出されて、思考回路がちょっと捻れたただけだ。うん、落ちついてきた。

覚悟を決め、強面集団を睨みつける。

「ハッ、やろうつてか？ いいだろう。ボツコボコにしてやんよ！」

鉄パイプを振りかぶって俺に向かってくる。俺は、その攻撃を横に移動して避けようとして、――刹那、わき腹に激痛が走った。別の奴に殴られたらしい。一瞬息が止まった。

その間にも正面の奴の鉄パイプは俺に迫る。それを手を顔の前でクロスさせることで受けようとして、また、横から衝撃が走る。耐えられず崩れ落ち――

「ガッ、ゲホッ」

ドスつと言う音が聞こえ、肩に衝撃。もはや痛みを感じない。わき腹に入った衝撃のせいで、呼吸がしづらい。思わずむせてしまう。四つん這いになったところで、腹に衝撃。

「ゴホッ、ぐっ、おええっ」

力が入らない。吐血し、完全に横たわる。

「もう終わりかぁ？ アァン？」

耳も遠くなつたみたいだ。耳鳴りが聞こえる。

『——…びよ………』

耳鳴り、いや、声のような雑音だ。

『——…いやあ、やつぱ……戦闘シーンのびよう……は苦……
だなあ』

「もうやめて!—」

由希ちゃんの叫び声に混じって雑音が聞こえる。

『——…そもそも、鉄パイプもってコンビニにいてのは無理
があつたかなあ。』

ブツブツと、途切れ途切れだった声が、今度はハッキリと聞こえた。

あんゆーじゅある（後書き）

コンビニの前に鉄パイプ持ったヤンキーが、しかも昼間から居るわけねえだろ！！　　って思いながら読んだあなた。実は仕様です。そこらへんはわかってて書いてます。まだなんのこっちゃ？　とわからない人は次話で「声」の詳細を書くのでそのとき分かるんじゃないかななんて思ってます。　　あと、更新遅れて（まあ待ってくれている人はアクセス数的にいないけど）すいませんでしたm（――）m。

じつど、おいす！

『——だいたい、由希がなんで囲まれてるかの描写もないし、まあ、その辺は読者の想像に任せるか』

なんだ、この声は？

『——しかしまあ、勝手にキャラが動き出すって現象は噂には聞いていたが、よもやマジで動くとは。勝手に動くって、元は作者のペンが勝手に動き出すことの比喻だろ？ なぜリアルに動き出してるんだよ……』

「……だ、れだ？」

『ん？ <……だ、れだ？> 誰だ？ って、お前まさか、俺の声が聞こえるのか！？』

驚いたような色を出す謎の声。間違いない。こちらの声に応えている。

「ああ、き、こえて……いる。お、れの声に、応えたっていうことは…… ごほつ、幻聴じゃ、ないんだな？」

いや、応えても幻聴じゃないって保証はないか、なんて頭の中で訂正する。

発したのはかすれるような小さな声。それも、なんとか振り絞ったような声だ。

なのに……。

『ああ。幻聴ではないな。まあ確かに応えたからといって幻聴でないというのには同意見だが……。あと、どんなに小さな声でもわかるぞ。そっちの会話は全て文字で出てきている。ついでに思考も、な。』

ついでに、の後は、なぜ言葉で発していないことまで分かった？と疑問に思った瞬間に付け加えられたものだ。

だが、尚更幻聴の可能性が高まったような気がする。思考を読まれている、ということから、そういう思考に至った。

『はあ、幻聴を疑うのも仕方ねえかもな。お前ボロボロだしな。…それにしても、登場人物と喋る作者ってどうなんだよ……。普通はタブー、反則技だよなあ。』

作者って表現はなんなんだ？ 反則って、なにがだ？ 登場人物って誰のことだ？ ……頭の中がパニックになった。

『物語の登場人物と話せる作者って……。端から見たらただのイタイやつだよなあ……。』

物語の、登場人物？

尚更混乱してきた。

『まあ混乱する気持ちもわかるんだが、今はそんな場合じゃないんじゃないか？』

そういわれて、やっと周りの状況に気がつく。

「お願い！！ もうヤメテ！！」

俺とヤツらの間で手を広げ、必死で俺のことを守ろうとしてくれている由希ちゃんの姿が目に入る。

「女は引っ込んでやがれ!!」

そういつて由希ちゃんに向かって凄む。しかし由希ちゃんは俺から離れようとしない。逆に俺にしがみついて俺を庇ってくれている。

ハハハ、俺、情けないな。好きな女の子守れなくて、逆に守って貰ってるよ……。

本当に、情ケナイ。

コノママデ、オウルノカ？

ホントウニ？

「ちょっと痛めつけてやらねえとわかんねえみたいだな。本当は後でじっくり楽しむだけにしようと思ってたんだけどなあ」

ニヤリと口角をあげるひとりの大柄な男。この男、不良集団のリーダー的存在なのだが、これまでいつだって仲間たちと好き勝手暴れてきた。

気に入らないやつがいれば殴る。いい女がいれば無理にでも絡む。

男からしてみれば、いつも通りのことだったのだ。なんてことない日常。ただ今日の女は超が付くほどの上玉だ。たったそれだけ。それだけがいつもとは違った。

——今日についてる。

まあ、口だけの弱い男が割り込んできたが、生意気だったから少し強めに痛めつけてやった。今は気絶しているのか、ぴくりとも動かない。もしかして、死んでないよな？

だがひとまずこの弱い男のことは無視して、この女に楽しませて貰おう。生意気なことに、弱い男のことを庇ってやがる。2、3発殴って屈服させてやろう。そう思ったときだった。

女の後ろの気絶していたはずの男が、ユラリ、と立ち上がったのは。

秀斗は起き上がってまず第一に、自分の体の軽さに気が付いた。
あの変な声は、『シュジンコウホセイをかけてやる』とかなんとか言っていたような気がしたが、正直シュジンコウホセイが何かよりも今は由希ちゃんを助けることが大事だ。

「え？ ……秀斗くん？」

まだ混乱してるのか、秀斗くん、なんて呼び方をする。滅茶苦茶嬉しいが、喜んでいる暇はない。

「ゆっ、柏木、ごめん。ちょっと下がっててくれるか？」

あぶねあぶね、勢いで由希ちゃんって呼んじゃうとこだった。

「だめ！ 無理しないで！ お願いだからっ」

立ち上がり男達に向かう俺を必死で止めてくれる由希ちゃん。その瞳にはうつすらと涙が浮かんでいるように見える。

……ごめん。頼りなくて、情けなくて。

けど、今だけは。

「大丈夫。ちょっとあいつら殴ってくるね」

ちよつと笑みをを見せてから一步前にでる。

男達は一瞬ギョツとするが、次の瞬間にはニヤリと気味の悪い笑みを貼り付けてそれぞれの獲物を持ち直す。

……今だけは、こいつらに勝てる気がするから、だから。

「へっ、何度来たって同じだ！」

男のひとりが鉄パイプを振りかぶる。

……今だけは、頼って欲しいな。

振りかざされる鉄パイプ。それを横に一步動くことで躲す。べつのやつの横薙ぎをバックステップで避けたところで、違和感に気がつく。

異常な程に体が軽い。それに、ぼやけていたはずの視界もクリアになっていく。というかそもそももついさっきまで動けなくなる程のダメージを受けていたはず。何かがおかしい。

その最たるは……。

「くっそ、何でこんなに身のこなしが軽くなってるんだよー！」

二撃目の横薙ぎと同じような攻撃を屈んでやり過ごす。

あの、なぜこの方々はゆっくり動いていらつしやるのでしょうか……？ とりあえず体を捻って相手の鳩尾辺りに拳をいれる。キレイに入って腰を折る男。追撃で蹴りを入れる。

そうして1人、また1人と足下に転がってゆく男たち。気づいたら6人のうち1人も立っていないかった。

なぜ？ なぜ、急にこんなに強くなったんだ？

『主人公補正だ。』

うわっ！　びっくりした〜、急にさっきと同じ声が聞こえた。ん〜、幻聴？

『……いちいち面倒くさいから幻聴だと思っても差し支えないぞ。』

じゃあそうしよう。幻聴だ。シカトシカト。

『お前、結構いい性格してるじゃねえか。』

あ〜あ〜、なんも聞こえな〜い。

『……もういい。これは俺の独りごとだ。お前は主人公補正によって身体能力が飛躍的にアップしたんだ。いくつかのオプシオン付きでな。そのひとつが、闘いになると相手の動きがゆっくりに見える能力だ。』

ふむふむ、なるほど。その、シュジンコウホセイとやらで俺の目がよくなったと。ん〜、納得納得。

できるかバカヤロウ。

『あー、うん。まあ、信じられない気持ちは充分に分かるんだがなあ。今のところこれで納得しといてちょ。ちなみに主人公補正は何も身体能力上昇だけじゃねえからな。』

だけじゃないって、俺に何をしたんだよ！　他には何が起こるんだ！？　というかお前は何者なんだ！？

『だから主人公補正と言っているだろう。まあ、他に何が起こった

かはおいおい分かるだろ。んで、俺は何者なのかってことだが……。

『この世界の神様、とでも思っておいてくれ。』

そこでプツンと切れた声。待ってくれよ！ まだ聞きたいことがあったのに！ 何が神様だよ！ シュジンコウホセイってなんだよ！ なんてなんだよ！ なんて、なんて……っ！！

「なんでく納得して『ちょ』>なんだあああつつ！！！！」

湧き上がる疑問と怒り。『ちょ』って言われたときすげえイラつとしたもん。

ふと我に返ると、なんだかキョトンとしながらも、

「ど、どうしたの、柴又君！？ 大丈夫？」

てな具合に心配してくださっている由希ちゃんがいるわけで……。あら、由希ちゃん呼び方戻しちゃったのね？ ちょいと残念。

うん、現実逃避はこれくらいにしよう。どうやら心の叫びを声に出してしまっていたらしい。

……穴があつたら入りたいです。そして二度とでられません。

「あ、あはははは。なんでもない気にしないで」

爽やかに歯を光らせて親指を立てる。……墓穴掘ったような。

「……ホントに大丈夫？ 頭打ったり、してない？」

「あー、うん。ホントに大丈夫だから」

頭の心配をされて俺のハートに大ダメージ。本人が嫌味でなく本気で心配してくれているようだから救われねえ。

「ホント？ ……あまり無茶しないでね。ボロボロだったのに、無理して立ち上がって……。すごい心配だったんだから！」

「あ、うん……。ごめん……。心配、掛けちゃったね。」

本当に情けないな、俺。こんなに心配掛けてしまうなんて……。

「でも……」

由希ちゃんが口を開く。

「でも、本当にありがとう。」

向けてくれたのは、笑顔。

「男の人たちに囲まれたとき、とっても恐くつて。周りの人たちは見て見ぬフリして。そんなときに柴又くんが来てくれて。とっても嬉しかった。」

由希ちゃんのその言葉に、最初関わりたくないなんて思ってた自分が、恥ずかしくなって。苦しくなって。

「……。俺も、本当は最初、無視しようと思っちゃったんだ。周りのヤツらとおんなじ。情けないヤツだよ」

思わず発した言葉。

「ううん、違う。だって、柴又くんは来てくれたじゃない。情けないなんてことない」

「それは襲われてたのがたまたま柏木で、柏木は俺の、えと、その、知り合いで。だから助けようと思ったただけなんだ」

好きな人だから、なんて言えるはずもなく、ちょっと迷って知り合いって言葉を使った。

「ううん、そんな理由なんてどうでもいいの。助けに来てくれたっていうのは事実なんだから。男の人たちの前に立ち塞がってくれたときの柴又くん、その、か、カッコよかったよ」

恥ずかしそうにそういつてくれた由希ちゃんの言葉にちよつと救われて……。

そして、萌え死にしそうになった。

お互い顔が赤くなつたまま流れる沈黙。いい雰囲気、と思える人もいるかもしれないが、少なくとも俺はそうは思えない。そもそも

沈黙つてのはお互い何も喋っていないというだけであり、周りは騒がしい。すっかり忘れていたが、周りには男達が転がったままである。その男らの低い呻き声が聞こえている。そしてなにやらサイレンの音も聞こえるのである。どうやら誰かが通報した模様。とまあやけに冷静に周りの様子が見えていたのでいい雰囲気だなんて思えないのである。このあとはきっと事情聴取つてやつなんだろうな……。

案の定警察署にて事情聴取があった。俺一人で6人倒したってうちよつと信じ難い状況に聴取は長引いた。

ようやく帰れる、となったときにはすでにお外は真っ暗。由希ちゃんを1人で帰すのは危ないっつーことで俺が送ることになった。警察さんよ。できれば送っていつて欲しかったぞ。

由希ちゃんと俺の家は近い。なにせ俺の家の近所のコンビニに来ていた位だからな。まあそもそも由希ちゃんとは中学時代からの縁なのだから当然と言えば当然かな。

それともう一つ、俺は怪我をしたようだ。全身軽い打撲。骨折はしなかったようだ。これもシュジンコウホセイというやつなのだろうか……。

ってなんか俺の思考、説明っぽいな……。

『うーん、思考を操れるのは相変わらずこれが限界だな。読者様への説明程度ならして貰えそうだな』

また声が聞こえたが、よくわからなかったのでシカトした。日常生活に支障がでなければいいが……。

まあなぜこんなにも考え事ばかりしているかというところ、緊張しているからだ。だって好きな人と二人きりだよ？ いや、チャンスはチャンスかもしれないけど、緊張のせいで話題が浮かばない。由希ちゃんもなんだか下向いて考え事してる模様。こりゃなんも話しだせない。

沈黙だけが過ぎるなか、そろそろ限界とばかりに話しかけようとする、

「私の家こなんだ。じゃあ、また明日ね。今日は色々ありがとう」

な、なにいい？ もう着いてしまったか。なんたる不覚。

「あ、お、おう。また明日」

俺のバカ！ 意気地なし！
肩を落としながらも家路につく。

「あ、あの、柴又くん！」

するとあらま、呼び止められた。

「あのっ、えっと、その……」

「ん？ どうした、柏木？」 そう問うと由希ちゃんはなにやら一つ深呼吸して、何かを決心したかのように一言。

「ひ、秀人くんって、呼んでも、いいかな？」

不意に、本当に不意に、爆弾は投下された。

いっど、おいす！（後書き）

遅れて申し訳ありません（――）m

ひとつお知らせです。

「あれ？ コイツの小説一本減ってね？」と気がついた方々もいらっしゃるかもしれませんが、この度一時的に公開を止めました。理由はお気楽2本書いている中で、スイッチの切り替えが厳しかったということと2本に集中しようと思い、その上でしばらく更新する予定のない小説を公開しておくのは申し訳ないと思ったからです。小説自体を消した訳ではありませんが、直接アクセス以外では見れないということになっておりますのでご了承ください。

一応URLを貼って置きますので興味のある方はどうぞ

<http://ncode.syosetu.com/n4582g/>

今後も本拙作をよろしく願いたします（・・・・・）

2009 11/8 17:28 しげつきー

あふたーふぁいと

「はぁ……」

湯船の中、思わず出てしまったため息。思い出されるのは、由希ちゃんのさっきの言葉。

——ひ、秀人くんって、呼んでも、いいかな？

「っふう……」

思い出して悶え死にしそうになった俺は病気ですか？

あのときの由希ちゃんの表情。いつもは真っ白な頬が赤く染まり、きらきらな瞳がウルウルでいやっほおおおおおおお！！！！！！！！

い、いかん。また思い出してテンションがあがってしまった。きつとはたから見たらさぞかし気持ち悪いんだろうな俺とか気にしない。だって幸せなんだもん。だってだってなんだもん。

あの強面のお兄様方との喧嘩で負った傷は、信じられないほど軽かった。とはいえ擦り傷きり傷は満載だ。帰っていた母さんに説明するのは苦労した。ちなみにこうやって湯船につかっている水面下ではめっちゃめっちゃ痛いのを我慢していたりする。

一軒家の我が家に暮らすのは、父さん、母さん、俺、そしてポン助。ちなみにポン助はタヌキではない。犬である。はじめて会ったその時から太り気味の柴犬で、我が家の癒し系アイドルだ。

外からはそのポン助が吠えているのが聞こえる。犬つてのは、暗い中で人が通るとむちゃくちゃに吠えるからなあ。

そして思い出されるのはまた由希ちゃんのこと。何か他のことを考えては由希ちゃんのことを考えて……。そんな無限ループで、夜は更けていく。

学校に着いてみると、まず目に入っただのは、カズの姿。

「お前、聞いたぞ。不良を撃退したそうじゃないか！ 大丈夫か？ …… って、なんか大丈夫そうだな。」

教室に入るなり駆け寄ってきたカズ。

「まあまあ落ち着きたまえ。朝の挨拶をお忘れだぞ。おはよう」
そう言っただけでカズはニヤリ、という笑みを浮かべ、バシン、と俺の背中をたたいた。

「はう！」

打撲しているというのに、こいつというやつは……。

「ははははは、これがブラジル流の挨拶なのだよ。ブラジルとか行ったこともないし文化のことも知らんが」

つまりは本家のブラジル流の挨拶など知らん、ということか。

「わはははは、やりたい放題だぜ！ おら、おら」

「ぐう、馬鹿、ヤメ口って！」

すぐ後ろの扉が開いた。そこから出てきたのは、昨日の事件の真只中にいた人——要は由希ちゃんだ。

「あ、えつと、お、おはようひ、秀斗くん」

「あ、ああ。おはよう。ゆ——柏木さん」

由希ちゃんと呼ばうとしたけど無理でした。そんな俺はへたれですたい。

柏木さん、と言ったとき、ちょっとだけ眉が下がったような気がしたんだ。

終業のチャイムが鳴った。

なぜだろう。今日一日、その、由希ちゃんの態度がよそそしいというか。以前までとは何か違う。前のほうが気楽に話せていたような気がする。お兄ちゃん悲しいよ！ 弟も妹もないけどさ。

怪我のせいで部活に出ることは出来なさそうだ。さて、帰ろうかな。

「おい秀斗。帰ろうぜ」

話しかけてきたこいつの名前は、大沢 健吾。クラス替えの後に仲良くなったのだが、こいつは帰宅部だ。帰宅部なのにもかかわらず坊主頭という変わったやつだ。ちなみに背は小さい。性格はその身長に似合わず豪快だ。ホリの深い顔立ちをしている。

「ああ、けどちょっと待ってくれ。奈保に今日部活出れないって言うってくる」

奈保っていうのは俺の友達で、同じテニス部に属している。うちのテニス部はとも小さいので、男女混合だったりする。奈保の本名は上村 奈保。容姿はモデルのよう、とよく言われる。背も高めで足も長く、おまけに顔立ちも整っているのでピッタリの表現だと俺は思っている。

「ん？ まだ連絡してなかったのか？ メールかなんかしておけば良かったのに」

「いや、それがなんか携帯の調子が悪くて」

多分昨日衝撃が加わったんだろうなあ。はあ、修理に出すの面倒くさい。

場所は変わりコート前。準備体操をしている奈保を見つけて近づいていく。

「わあ、秀斗！ 大丈夫だった？」

「ああ。ご覧の通りね」

どうやら奈保も事件について知っているらしい。

「携帯も繋がらないからすっごい心配したんだよ？ それはもう授業中も眠れないくらいに」

「嘘つけえい。顔に痕が付いてるぞ。それに心配なら直接見に来ればいいでしょうが！」

「えへへ。バレたあ？」

そうやって笑う彼女の頬にはくつきりと教科書の痕がついていた。普通なら恥ずかしいことこの上ないが、奈保は一切気にしない。そんな大雑把なところがあるが、えへへっ、と笑う彼女のその笑顔の前ではそんなこと塵ほどにも気にかからない。むしろそんな大雑把なところもチャームポイントにしてみようだろうなあ。なんて、各階のベランダから彼女ののことを見ている集団を見て——あ、今こっちを睨みやがった——思った。

「今日はゆっくり休んでね」

そういつて俺を送り出してくれた奈保と別れ、危うく忘れかけて

いた健吾を迎えに教室に帰った。

教室に入ると、そこに健吾の姿はなかった。代わりに黒板にでかでかと、

『秀斗へ。悪い！ 今日早く帰らなくちゃいけなくなった。女の子が俺を呼んでいるぜ！！ 合コンひゃっほおおおおおおおおい！！！！！！』

一気に落ち込んだ。まあ、あれだ。うん。俺ドンマイ。

「あ、あれ？ 秀斗、くん？」

天使のような声が聞こえた。こ、こ、この声は、由希ちゃん！？ 後ろを振り向くと、すぐ後ろのドアから由希ちゃんが入ってくる場所だった。

まさに今朝の再現。朝の光景から、二人だけを切り取ったかのような。

「ああ、柏木さん」

努めて冷静を装う。が、しかし。内心はドッキドキだ。

「秀斗くん、まだ帰ってなかったんだ」

「ああ、うん。実はさ、黒板にあるとおり健吾がうつほほい！なんだよねー。んで、置いてかれちゃった」

うつほほいなんて書いてないが、まあ伝わるだろう。

「ふふ、秀斗くんって面白いね」

由希ちゃんがぐすりと笑う。

「そうかな？ まあ、ちょっと変かもだけど」

そついうと由希ちゃんはまたぐすりと笑い・・・。

「ところで、秀斗くんはこれから帰るところ？」

突然の話題転換。

「うん、そうだけど」

たいして何も考えることなく答える。

「じゃあ、一緒に帰ろ？」

平然と爆弾を投げ込んできますな。お兄ちゃんびつくり！ まあ弟も妹もいな（ry

「ねえ、秀斗くん？」

なんだかちよつと不安げに聞いてくる由希ちゃん。

「なあに？」

「私、秀斗くんに嫌われるようなこと、なにかしたかなあ？」

それは、またも唐突だった。

「え？　なんで？」

言葉の意味が理解できない。だって、由希ちゃんのこと嫌いになるようなことなんて何もない。好きになるならまだしも・・・。

「だって、昨日メール返してくれなかったじゃない」

・・・なるほど。シカトしたと思われてるわけか。

「実八昨日携帯壊レテシマイマシタ」

「え！？　そうだったんだあ。よかったあ。てつきり嫌われたかと……」

「別に柏木さんのこと嫌いになるようなことされてないし」

「あー！！」

急に大きな声出すもんだからびつくらこいた。

「また柏木さんって言ったー！！　私だけ名前で呼ぶなんてなん

か不公平だよー！！」

そして俺のことをビシッと指差し、

「これからは由希って呼びなさいー！！」

あふたーふぁいと（後書き）

更新遅れてすいません。また休止すると思います。詳しくはテツガ
クのニチジョウのあとがきにて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2558h/>

ごっど うゝ おいす！

2010年10月28日07時28分発行